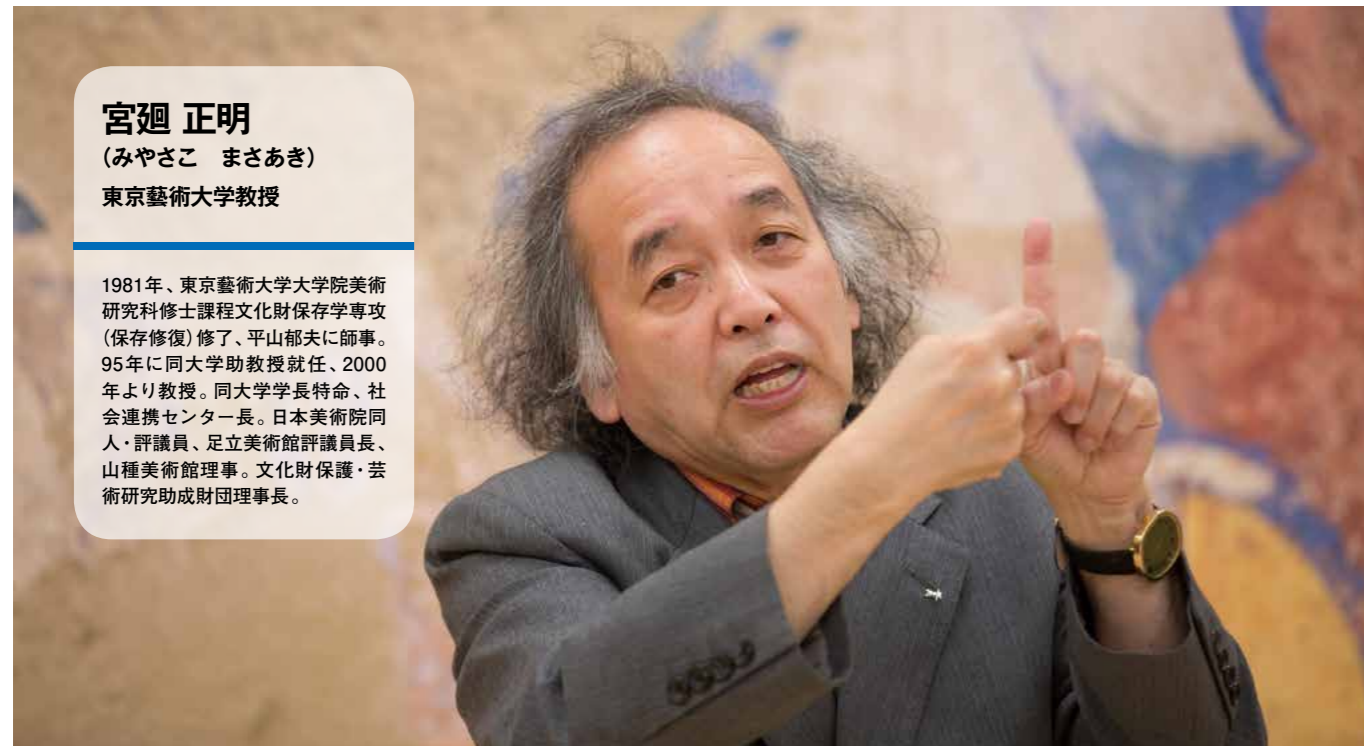


Focus 01 アフガニスタン流出文化財を救う



宮廻 正明
(みやさこ まさあき)
東京藝術大学教授

1981年、東京藝術大学大学院美術研究科修士課程文化財保存学専攻(保存修復)修了、平山郁夫に師事。95年に同大学助教授就任、2000年より教授。同大学学長特命、社会連携センター長。日本美術院同人・評議員、足立美術館評議員長、山種美術館理事。文化財保護・芸術研究助成財団理事長。

東西文明の十字路として栄えたアフガニスタン。果てしなく続く戦火により貴重な文化遺産が破壊され、略奪されてきた。バーミヤンの東西2つの大仏も2001年3月に無残に爆破されてしまった。

その惨状に心を痛めた故・平山郁夫・東京藝術大学元学長は、戦乱によりアフガニスタンから流出した文化財の保護と保全に乗り出した。このときに集められた102点の流出文化財がこのほどアフガニスタンに返還されることが決まり、東京藝大 COI 拠点が、バーミヤンの天井壁画を蘇らせた。

壁画は多様な文化共存の証し

シルクロードを舞台に優れた作品を描いてきた平山元学長は、バーミヤンの大仏が破壊された当時、ユネスコ親善大使を務めており、「流出文化財保護日本委員会」を組織し、国外に流出したアフガニスタンの文化財の救済に乗り出した。

同委員会では、これまでに国立カブール博物館から奪われた「セウス神像の左足」「カーシャバ兄弟の仏礼拝図」など102点を保護している。バーミヤンの大仏についても、日本が資金を出して、日本、ドイツ、イタリアの専門家チームが瓦礫を整理し、岩窟の天蓋を飾っていた壁画などの調査を進めてきた。

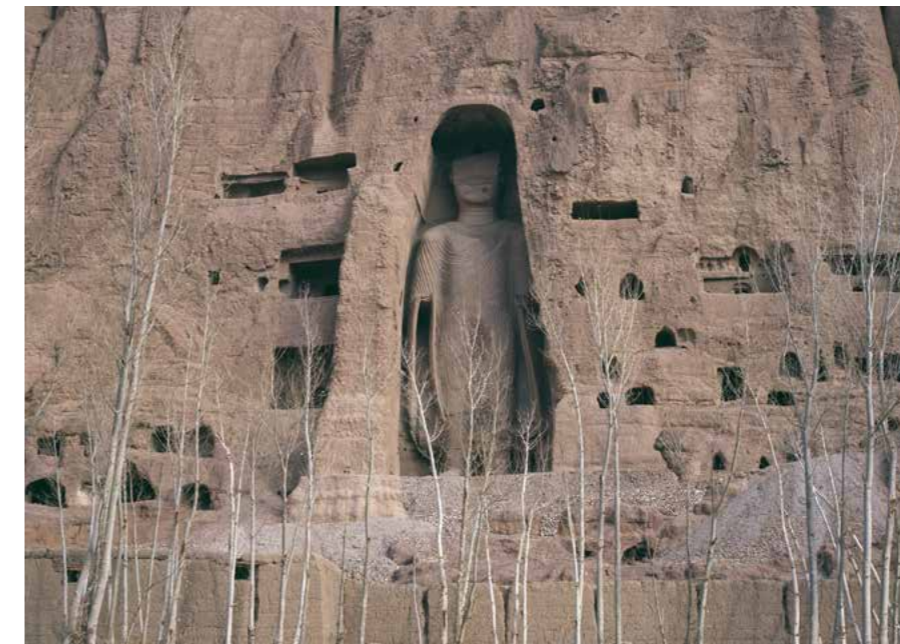
しかし、大仏はもとより天井壁画も完全に破壊されており、その復元は不可能とみられた。この困難な復元に挑戦したのが、流出文化財保護日本委員会の現委員長でもある宮廻

さんである。「東大仏の天井壁画は、縦7メートル横6メートルのアーチ状の岩壁に描かれていました。幸い、1970年代に京都大学中央アジア学術調査隊が撮影した膨大な写真が残されています。これが復元の重要な基礎資料になったのです」とそのきっかけを語る。写真は、この地が東西文化の十字路であったことをよく物語っているという。

ある地域に新たな文化が入ってくると、両者は混ざり合って新しいものに変容しがちである。しかし、バーミヤンの天井壁画には東西の神仏が仲良く同居しており、描かれている人物もヨーロッパ系、インド系、東洋系などさまざまな顔立ちをしている。まさに、壁画は多様な文化を認め合い共存してきた証しだ。

平和を希求し、アフガニスタンの人々の心身のよりどころを取り戻すために、東京藝大が開発した壁画複製特許技術で復元することに

失われた壁画をクローン文化財として復元



京都大学中央アジア学術調査隊によって撮影された破壊前の東大仏

した。壮大な復元プロジェクトを突き動かす貴重なメッセージが壁画にはあった。

「クローン文化財」を創る

アーチ状の岩窟に描かれた壁画を原寸大の3次元壁画として復元することは、世界でも初めての挑戦である。2015年にスタートしたプロジェクトは、芸術と科学技術が力を合わせることで実現した。

「もともと芸術と科学は一体のものです。画家は、顔料の調合を研究し、光の作用や遠近法を発見し、人や動物の解剖学的形態を科学的に探究してきました。ルネサンス期を代表する画家のレオナルド・ダ・ヴィンチは、数学・物理・建築・医学・天文学などに通じた大科学者でもあったのです。しかし、近代になって専門化が進み、芸術と科学は対極にあるものとみなされるようになりました。芸術と科学の親和性を回復し、両者の融合で新たな『感動イノベーション』を創造することが私たちのテーマです」と目的を語る。

日本画家である宮廻さんは、専門にこだわらず、グラフィックデザインやオペラの舞台監督、美術監督などを幅広く手掛け、東京藝術大学大学院では文化財保存学の講座も持っている。

「文化財の保存は学生時代から研究してきました。絵画などは紫外線や温度、湿度などの影響による劣化が避けられず、保存を優先

するなら一般公開はできません。日本では、古くから大切な文化財を模写して人々に披露し、後世に伝えてきました。模写は単なるコピーではありません。文化財の状態を精査し、芸術性や技法の研究を通じて新たな芸術を創出する芸術的行為であり、私は模写作品を『クローン文化財』と呼んでいます。

クローン文化財は、失われたオリジナルと同素材、同質感だけでなく、技法、素材、文化的背景など、芸術のDNAに至るまで再現する。クローン文化財があれば、誰もが名品に接することができる。しかし、これまでの模写は職人技の世界であり、1枚の模写を仕上げするのに10年以上かかることもあった。もっと短時間に精密に描けないものかと、科学技術と伝統技術の融合をめざしていた。

東京藝大は、模写技術で世界屈指の実力をもつ。そこに最新のデジタル撮影技術や2次元、3次元の印刷技術を融合させることで、文化財を高精度・同質感で再現する特許技術を開発した。この独自技術を生かす場として「東京藝大アートイノベーションセンター」を創設し、これまで平等院の国宝扉絵の複製などに取り組んできた。

2015年、COI「感動」を創造する芸術と科学技術による共感覚イノベーション拠点が、1年半のトライアル期間を経て正式に採択され、昨年3月には芸術と科学の産学連携拠点となる「Arts & Science LAB.」が上野キャンパスに完成した。

蘇った「法隆寺の壁画」 「ボストン美術館の浮世絵」

東京藝大 COI 拠点の「文化共有研究グループ」は、トライアル期間中に、1949年に火災で焼損した法隆寺の金堂壁画の復元に取り組んだ。焼損前に撮影されたガラス乾板やコロタイプ印刷、画家による模写などの多くの資料をデジタル技術によって統合したうえで、壁画複製特許技術を用いて焼損前の姿を原寸大での復元に成功した。作品は、2014年4月に東京藝大美術館陳列館で「別品の祈り—法隆寺金堂壁画—」として展示公開し、大きな注目を集めた。

さらに、法隆寺の国宝釈迦三尊像の科学的な調査も実施している。仏像の3次元計測、蛍光X線分析、高精細デジタル撮影、近赤外線反射撮影などにより豊富なデータを得ることができた。これらをもとに、材質や鋳造法などを研究することで、忠実な複製の制作につなげることができる。

次に取り組んだのは、浮世絵の復元であった。幕末から明治にかけて、日本の浮世絵版画は外国人に高く評価され、多くの作品が海外に流出した。中でも、質や色彩などが保たれ世界で最も美しいといわれるのが米国のボ



カーシャバ兄弟の仏礼拝 (2~3世紀)



ライオン像断片 (3~5世紀)



菩薩像頭部 (3~4世紀)

アフガニスタンから流出した文化財



法隆寺金堂壁画の復元制作風景

ストン美術館が所蔵する「スポルディング・コレクション」である。

製糖業で富を築いたスポルディング兄弟が寄贈した同コレクションは、菱川師宣から喜多川歌麿、東洲斎写楽、葛飾北斎、歌川広重まで120人を超える絵師の美人画、風景画、花鳥画約6,500点にのぼる。しかし、寄贈の際の「一般公開しない」という条件のため、約100年にわたり人目に触れることなく倉庫に眠っていた。

貴重なコレクションを何とか公開することはできないものかと考え、NHKプロモーションとボストン美術館は共同でコレクション画像のデジタル化を行った。このデータをもとに、研究グループが浮世絵の「クローン文化財」化に取り組み、摺り立てに近い状態を再現した「うつし」と、経年により色彩が変化した「うつろい」の2種類を制作した。浮世絵独特の「空摺り」と呼ばれる、色彩を用いないで紙に凹凸をつける表現も特殊加工で再現した。また、作品は、真贋問題が起きないように105%の大きさを制作した。

再現された浮世絵は2015年4月に「ハイカラ 一覚醒するジャポニズムー ボストン美術館 スポルディング・コレクション」として、東京藝大にて一般公開を行った。展覧会では、葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」、歌川広重「東海道五十三次之内 日本橋 朝の景」、喜

多川歌麿「娘日時計 午の刻」などを展示した。

宮廻さんは「浮世絵など日本の紙画は、19世紀ヨーロッパのモネやゴッホなど印象派の画家に『ジャポニズム』として大きな影響を与えました。構図や色彩だけでなく、絵の具を塗るのではなく置いていく描き方、絵の具を盛り上げる技法などが油絵に革命をもたらしたのです。浮世絵の復元では500%拡大作品も制作し、浮世絵版画の彫りや摺りの技の細部を目のあたりにできるようにしています」とこれまでの実績を説明する。

手作業と最新の印刷技術で質感まで再現

バーミヤンの天井壁画の復元は、金堂壁画や浮世絵の復元を通じて深めてきた技術を結集し進められた。

まず、1970年代に京都大学学術調査団が撮影した1万5,000点近くの写真から、東大仏の天井壁画が写っている約150点のカラー写真を選んだ。このうち、岩窟の底から天井壁画全体を撮影した写真は、岩窟の高さが33メートルもあるため、復元に必要な解像度が得られなかった。そこで、壁画の間近から分割撮影された写真をつなぎ合わせて全体像をつくることにした。

また、天井壁画はアーチ状の岩窟に描かれていたので、平面写真をつなぐだけでは再現できない。研究グループは、爆破後にドイツの調査団が東大仏の岩窟を計測した3次元データから、写真の歪みを補正しながら壁画の展開図を作成し、デジタルデータ化した。

ここで、宮廻さんがこだわったのは、芸術作品としての完成度を高めることであった。

「今回の目的は、学術的に忠実に復元することではなく、バーミヤン文化のシンボルを復元することです。復元した壁画が見る人にどう映るか、どう感動してもらえるかということをお大切に仕事を進めました。破壊される前の壁画は色褪せたり剥落したりしているところも多く、どこまで補正するかという、さじ加減がポイントでした」

復元作業は、天井壁画のサイズが6メートル×7メートルあるため、まず60%に縮小して展開図をプリントし、京大が撮影したカラー写真や東京藝大が保管しているバーミヤンの壁画片などを参考にしながら、プリントに手描きで色の補正を施していった。大きな剥落がある部分や、鮮明な写真が存在しない部分は過去の資料を参考に想定できる範囲で補った。こうして仕上げた壁画の展開図を、もう一度撮影して最終的なデジタルデータとした。

このデータをもとに、原寸大の天井壁画を制作した。まず、軽い材料で岩窟壁面の土台を作った。ここでもドイツ調査団の3次元データを参考に岩壁の微妙な凹凸まで精密に再現、成型した。この土台に、石粉粘土などを塗って岩肌のマチエール（質感）を整えた。壁画をプリントする和紙にも石粉粘土を薄く塗ったうえでインクジェット印刷することで、ざらざらとした質感を生み出した。ちなみに、研究グループは膨大な画像データを短時間にプリンター出力できるデジタル環境も開発している。

こうして印刷した復元画像を、土台に貼り付けるだけでは完成ではない。最後に、オリジナルの壁画の質感に近づけるために、東京藝大が培ってきた日本画や洋画の保存修復技術を駆使して手作業で彩色を施した。顔料にも、アフガニスタンで産出するラピスラズリなどを素材とする岩絵具をできるだけ使用するなどこだわった。

壁画が剥落している欠損部分も、いったん土台部分まで削り取り、窪みに石粉粘土に土、砂、藁サなどを混ぜたものを塗り直すことで、剥落部分の粗い質感をリアルに再現した。

作品は、今年4月に東京藝大美術学館陳列館で開催した東京藝大アフガニスタン特別企画展「素心—バーミヤン大仏天井壁画—

バーミヤン天井壁画の復元工程



流出文化財とともに〜」に展示した。陳列館の会場に作品を組み立てるのに2日もかかったという。

復元された天井壁画「天翔る太陽神」を下から見上げると、圧倒的な存在感で太陽神が迫ってくる。ヨーロッパ風の優美な女神、半人半鳥の不思議な霊鳥、佝僂屋達の「風神雷神図」を想起させるペールをたなびかせる2体の風神、ヨーロッパ系、アジア系の豊かな表情をもつ供養者たちが太陽神をとり囲む。展覧会の会場では、岩窟の正面のスクリーンに、東大仏の目線の先にひろがるアフガニスタンの草原をプロジェクターで投影した。

この展覧会と歩調を合わせて、東京国立博物館では「黄金のアフガニスタン展—守りぬかれたシルクロードの秘宝」が開催され、アフガニスタン政府代表団が来日した。東京藝大を訪れた一行は、「こここそが、われわれの故国だ」と喜んだという。

流出文化財保護日本委員会が苦心して集めた102点の文化財は、アフガニスタン政府に返還されることになった。文化財を「本来あ

るべきところに置く」という平山元学長の願いが実現したのである。

直接手で触れ文化財に親しむ

「クローン文化財の効用のひとつは、“結界を破る”ことです」。宮廻さんはいささか驚かせるような言い方をした。展覧会では、ガラスや手すりなどで作品がガードされている。貴重な文化財を守るために必要なことだが、それでは本当に作品に接したとはいえない。クローン文化財なら間近に見ることができるし、観客に触れてもらうこともできる。

金堂壁画や浮世絵、バーミヤンの復元文化財の展示では、わざわざ「ふれてみてください」とのマークをつけて展示した。

「観客は当初、やや戸惑っていたものの、実際に触れることで作品に親しんでくれました」と狙いはズバリ当たった。

こうした考え方に共感したオランダ芸術科学保存協会 (NICAS) とも協定を結び、デルフト工科大学などと文化財の保存修復技術で

交流が始まった。ルノアールやゴッホの作品などのクローン文化財づくりを始めるなど、国際文化交流が進んでいる。

日本の玉堂美術館 (青梅市) とは、劣化を防ぐために常設展示できない作品のクローン文化財の制作を始めており、これがうまくいけば学校への巡回展示など教育にも活用する予定だ。芸術と科学の融合で垣根を低くし、名品に触れる機会をつくるのが、文化を育み、心を育み、絆を育む一歩となる。



「ふれてみてください」マーク



昨年開催された「ハイカラ 一覚醒するジャポニズムー ボストン美術館 スポルディング・コレクション」展